歴史点描　48　　鱸場という地名の話―1　洪水災害

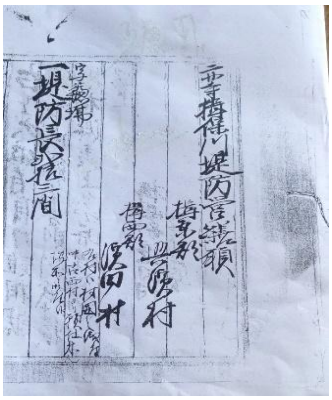
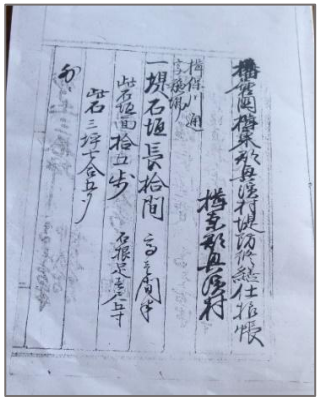
「鱸場（すずきば）」という地名は揖保川本流の右岸にある網干区興浜の小字（こあざ）地名で、上鱸場・下鱸場と川淵に南北に連なる。対岸に銀杏の大木越しに余子浜の船渡（ふなと）神社が間近に望め、隣接する江戸時代の豪商加藤家の浜座敷が素朴な佇まいで一景を醸す。

遥か昔から自然の猛威によって流路の変遷を余儀なくされてきた揖保川は、鱸場辺りで両手を広げたように二（ふた）派に分かれ、東向きに網干川を流し、西の本流は南下して東西両岸に興浜管轄の地所を作り上げた。古刹大覚寺を足掛かりに発展しつつあった東の地所に丸亀藩網干陣屋が置かれたのは万治元年（１６５８）のこと、本流の西は昭和末期頃まで、可憐な蓮華が波打つ田圃が広がっていたが、今はすっかり様相を変えている。

暴風時、水嵩を増した流れは勢いのあまり鱸場の土手へぶち当たり、堤防の決壊を招き大きな被害をもたらす。直面する鱸場の洪水の被害は枚挙にいとまなく、川東組大庄屋『諸事控覚帳』初出の資料は、「寛延２年（１７４９）７月３日大洪水、流れ家４軒、破損家２２軒中破損２１軒、そのほか村中納屋・小屋流れ破損半壊」と載せ、下流域唯一の「八十渡し船」も増水のため止まった。寛延２年と言えば姫路城下でも７月１日「寛延の大洪水」起こり、多くの犠牲者が出て市川左岸の山脇に溺死菩提碑が建てられている。暴風雨は姫路のみならず播磨南西部も襲い、多大な惨事をもたらしたようだ。以後毎年のように繰り返される氾濫は揖保川下流に（上流作（かみりゅうさく））（下流作（しもりゅうさく））の地名を生み出し農民の強（したた）かさを刻む。

明治８年（１８７５）６月、またしても水害に揖東郡興浜村と揖西郡濱田村両村から「揖保川堤防営繕願」次いで「揖保川堤防修繕仕様帳」の書類が自力では困難であると、差し出された。「字鱸場の堤防長サ２３間大破に付…別紙の「修繕仕様帳」によると堤石垣・砂（じゃ）り土３０坪・芝植・松木六本・根太（ねだ）木長サ２間などが必要と訴えるが、切なる願いは叶えられたのだろうか、結末を記す文書は残っていない。

網干歴史講座会員　垣内　田中早春



姫路市資料室所蔵水田家文書